赤の「叫び」

札幌市医師会
札幌清田病院
後藤　義朗

ムンク展の『叫び』を観るために東京都美術館に来た。1895年ムンクは美術雑誌に「私は不安に身震いし…　大きく果てしない叫びが自然を貫いていくように感じた」と散文詩を寄せた（美術手帳2018年10月号）。つまり、絵の中心にいる人物が叫んでいるのではなく、聞こえるのは自然の叫びなのだ(1/8天声人語にもコメント)。絵から音は聞こえないから想像するしかないが、ドォーと不気味な連続音か、地鳴りのような地獄からの蠢きなのか。

行列に「20分待ち」の表示が出たが、流れがよく、年代順に作品を見ていると順調に進行。ついに、その部屋まできた。突然二列に並び、絵の前で一列にされ、最後には「立ち止まらないで歩いて」と指示された。警備員の口調は柔らかいが、中味は厳しい。筆者の方が「いやー」と叫びたい。その絵を目的に来ているのに、絵の前を通り過ぎろというのは矛盾だ。主催者はたくさんの人に閲覧の機会を与えたいのだろうが、素通りでは本当に「見る」だけだ。凡人が観賞できても、短時間の遭遇では「叫び」の意味が分からないというのか（それも真実)。まずは、渦中の油彩の絵を見たという経験をさせ、観賞用にポスターを購入させようという魂胆なのではと邪推する。売店の前の混雑に、きっと主催者は嬉しい「叫び」を上げたに違いない。

『叫び』は統合失調的な絵画と言われる。「血を思わせる赤を基調とし異様にゆがむ空とフィヨルド、両手で頬を押さえて目を見開き、絶叫するかの如く口を開いた中央の人物」。この情景は当時のムンクが経験した恐怖に対する幻覚を表現したものだ。「統合失調症の恐怖の本質は、…　自分が世界の中心に位置づけられ、完全に無力のまま恐怖の渦中に宙づりになること」と分析されるが、筆者には理解できない世界だ。一方、ムンクを直接診療したヤコブソン博士は「アルコール中毒による麻痺性痴呆」と診断し、その治療が功を奏した。評論家で精神科医でもある斎藤環氏もその診断を支持している。また、ムンクは病弱でもあり、両親兄弟も病気で次々と亡くしていることから、「死」が身近にあったという環境は否めない。

昨今、地球温暖化で自然が崩壊され災害も多発する。この「声」は、自然の呻きの表れかもしれない。一方で、戦争と貧困の中で上げる人の叫びと重ねると、強烈な赤の中の人が聞く声は、時代を超え、人間と自然とを合体させた『地球の叫び』を聞いているように思えてきた。

転売サイトにご用心

江別医師会
むらかみ内科クリニック
村上　和博

2019年９月、日本でラグビーのワールドカップが開催される。札幌でも２試合が組まれている。こんなことは将来二度とないと思い、嫁に観戦のお伺いをたてた。即座に却下された。それなら一人で観に行くかと悶々と考えていた。数日後、「やっぱり観に行くことにしたので一番いい席をとっといて」と連絡があった。よっしゃーという気分でパソコンに向かう。幸運にも、まだ席はあった。よしよしという感じで確定を押すと、突然手数料を含めて〇〇ドルと表示価格より高い価格で決済されてしまった。えっー、そんなの聞いてないよと思ったが、キャンセルのボタンも何もない。後の祭りだったが、予約できたからいいかと前向きに考えた。すぐに予約確認のメールが来た。３日前までにチケットが届くとの内容であった。ちょっと遅すぎないかと不安になった。

しばらくして、新聞に小さな広告を見つけた。ラグビーワールドカップの公式販売が始まりますとのことだった。えっ、先日の予約は何だったの？　ということで、インターネットで調べた。予約したサイトは世界的な転売サイトであった。このサイトの評判を見ると、チケットが届かず困ったとか、コピーしたチケットが届き入場できなかったなどと、悪い評判の書き込みが多数見つけられた。やられたかもしれない。

万が一きちんとチケットが届く可能性もあるので、それ以上の購買は控えた。とりあえず、行けなかった時の憂さ晴らしのために、定山渓温泉の予約をした。はたして、私たちはこの９月にラグビーワールドカップを観戦できるのだろうか。心配でもあり楽しみでもある。

2020年には東京オリンピックが開催される。観戦希望の方もたくさんいると思う。転売サイトにご用心。